

「桜の香りのするきもの」を発表した

さとうとし たか
佐藤敏孝さん



普段着の着物を提案したい

東京の呉服問屋で修業後、家業の京染店を継ぐ。98年から「さくら染め」を手掛ける。北上市鍛冶町。56歳。北上市生まれ。

北上市の展勝地の桜を使って染め上げた「さくら染め」。十年目を迎えた今年の新作に選んだのは、香りのするきもの着物だった。「近年見直されている香りを通して、日本文化の奥ゆかしさを表現できたのでは」と出た来栄えに満足そうだ。

香りの秘密はマイクロカプセル。着物に付着したカプセルがはじけることにより、ほのかに香る。すでに活用されている技術を活用した。これまでの作品は京友禅やつむぎなど、織り方に特色を出してきたが、「今回は香りという目に見えないもの。お客さんの反応もよくほっとしている」と笑顔。

高校卒業後に東京で会社勤めを経て、日本橋の呉服問屋で三年間修業した。染め職人の父親の跡を継ぐため一九七六年に帰郷。「長男だったこともあるが、自然とこの道を選んでいた」

普段は温厚だが工房に入ると厳しい職人の顔に。ハンカチやショールなどの染めを手掛け、反物は京都の工房に依頼する。「さくら染め」でネームバリューも上がった。着物を着ることを楽しんでもらいたいと語る。

東京での修業時代に出会った妻の美津子さん(56)、母タマさん(85)の三人暮らし。一人娘は親元を離れ、京都で大学生活を送る。

普段から着物を愛用し、特定非営利活動法人(NPO法人)「きものを着る習慣をつくる協議会」の北上支部長として、振り袖パーティーや浴衣ツアーも企画する。「男性の参加も増えた。着ることで心の余裕が生まれる」と情熱を注ぐ。

(八重樫 和孝)